

電子の仮想空間も「フィールド」

主任学芸員（地球物理学）
戸田 孝



「どこでも博物館」というのは、博物館活動を進める「フィールド（現場）」は館内だけではないという意味です。この「フィールド」は、主に地域の自然や暮らしのことを指します。でも、電子ネットワークの仮想世界の中にも「フィールド」があります。

最近、ほとんどの博物館施設がネットワーク上で何らかの情報を発信するようになりました。とはいえ、その発信内容はさまざまです。簡単な来館利用情報にとどまる場所もあれば、さまざまな調べごと情報を公開している場所もあります。各館の電子活動を比較検討する中から、博物館活動の「あるべき姿」を探る「博物館学」の研究が進むこともあります。

また、電子ネットワークを利用した「人のつながり」



を展開しているところもあります。この展開は、インターネットブーム以前の「パソコン通信」の時代から各地で進められていました。琵琶湖博物館に関わりが深い「ホタルダス」「ピワコダス」「水環境カルテ」などの活動も、パソコン通信を通じた「人のつながり」で発展した側面があります。

このような「電子仮想空間」に関わる研究成果は、この「うみんど」誌上でも第3号・第20号などでご紹介してきました。今後も期待されるアプローチの一つです。

学生時代から考古学を学び、古いモノを観察することが好きでした。人間の作ったモノをじっくり観察すると、背景にある人間の生活の一端が見えてきます。例えば考古学者の森本六爾さんは、土器に付いた糊の圧痕が



湖で使用されていた漁具からは、人々と琵琶湖の関わり方を知ることが出来ます。例えば、コイトアミには、材質、網目、長さなどにさまざまな種類があります。これらを丹念に観察すると、魚を捕るために人々が創意工夫を重ねてきたことがよくわかります。

こうして整理した資料が、この3月に資料目録として公開され、多くの方に情報を共有していた。考古資料や民具資料と同じように、今度はこれが「今」の時代を語るモノとして保存され、未来の誰かが「今」の時代を知る手がかりとなれば嬉しいです。

今年の3月まで、県内各地で収集された1万点以上の民具資料について、その情報を記録し、写真や実測図を作成してきました。

民具でも同じで、琵琶湖で使用されていた漁具から、弥生時代に農耕を行っていたことを突き止めました。

ただ、今までは「はしかけ」として温故写真というグループで、「今」を写真に記録する活動をしていました。

民具の資料整理は一段落し、今は「はしかけ」として温故写真というグループで、「今」を写真に記録する活動をしていました。

過去から未来に向けて「資料」の語るもの

元琵琶湖博物館嘱託職員・はしかけグループ温故写真 國分政子

こんにちは！ 展示交流員です。



私たちは、琵琶湖博物館の案内だけでなく、展示を通してみなさんと交流し、みなさんに身近な自然や生活へ目を向けていただく『かけはし』となっています。どうぞお気軽にお声をかけてください。

今回は、B展示室で行われた「交流員と話そう」からの取材です。来館者の方とどんな交流があったのでしょうか。

「**「疏水**を歩く 疏水の水を使った庭」(中村交流員) 琵琶湖の水を京都に送っている琵琶湖疏水についてですね？」

琵琶湖疏水は明治時代につくられたもので、疏水からの水は京都のいくつかの庭園に引き込まれたり発電にも使われたりしています。琵琶湖の水が飲料水だけでなくさまざまな利用がさ



れているわけです。京都の文化を語るうえで興味深いものなので、ぜひ皆さんに知ってもらいたいと思いました。

何か、活動されているのですか？

疏水に興味がある仲間と一っしょに、現地を見に行ったり船に乗ったりして楽しんでいます。身近に水が存在している空間は癒しの空間であると思います。

「**弥生土器の文様**」 (石川交流員) このテーマを選んだ理由は？

もともと焼き物に興味がありました。それで前回、縄文土器についてお話をしてお好評だったので、今回は次の時代の弥生土器をテーマとして考えました。

来館者の方とはどのような交流をされましたか？

実際に土器のかけらを手にとってもらって観察してもらいました。そして、粘

土と道具（魚の骨、貝殻など）を使ってオリジナルの文様を作ってもらいました。

ガラスケースの中に展示してある土器のかけらは見過ごすことが多いと思いますが、こうやって実際に文様を作ってみると、土器についていろいろと理解してもらえたと思います。また、それが興味の発端になればと思います。

